日本語指示詞の直示用法の獲得（1）：
一女児1歳6ヶ月から1歳11ヶ月までの予備的研究*

大 野 清 幸

The Acquisition of the Deictic Use of Japanese Demonstratives (1):
A Preliminary Study of a Japanese Girl Y (1;6)-(1;11)

Seiko Ono

第1章 序

一女児（以下、Y児と呼ぶ）における日本語指示詞の直示用法に関する包括的な研究を実施する前段階として、本稿では、以下の (1)-(6) に示したような、Y児1歳6ヶ月から1歳11ヶ月における日本語指示詞の直示用法に関する予備的研究を行う。[1]

(1) 「これ」 Y (1;6.1)

```
> kwal +t*CHI +s"kore" +o%act -w5 +w5 @
kwal +t*CHI +skore +o%ACT -w5 +w5 @
Sun Sep 19 15:18:34 2004
kwal (07-Jul-2004) is conducting analyses on:
  ONLY speaker main tiers matching: *CHI;
*** File "Extra HD 3:04Ydata-V2:10601.cha": line 168. Keyword: kore
*CHI:      he: [/] he: .
*MOT:      atta: ?
*CHI:      un .
*CHI:      xxx .
*CHI:      xxx .
*CHI:      kore: .
*MOT:      nani yatteiru xxx ?
*FAT:      e: kyooryuu no ningyoo ga kowakatta yoo desu .
*FAT:      sutegozaurusu no ningyoo ga kowakunatta no .
*MOT:      soo nan da .
*MOT:      gohan wa tabeta jan ka .
```

(2) 「ここ」 Y (1;7.30)

> kwal +t*CHI +s"koko" -w5 +w5 @

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V3:10730.cha": line 2155. Keyword: koko

*MOT: nanka haitte(i)ru no ?

*MOT: haitte(i)nai yo ,, nan ni mo .

*CHI: are a: achi@u [/] achi@u .

*MOT: yoisho .

*MOT: ii jan ,, Ychan soko de .

*CHI: koko .

*MOT: dame nano ,, soko ja .

*CHI: koko .

*MOT: doko ?

*CHI: a:chi [: atchi] .

*MOT: koko .

(3) 「こっち」 Y (1;6.1)

> kwal +t*CHI +s"kotchi" +o%act -w5 +w5 @

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V2:10601.cha": line 1058. Keywords: kotchi, kotchi

*MOT: ii ne .

*MOT: kotchi no ocha ?

*CHI: <aq aq> [/] aq .

*MOT: nani supu:n wa ?

*CHI: un xxx .

*CHI: kotchi [/] kotchi .

*MOT: nan de ?

*MOT: ha: ?

*MOT: kore wa chigau yo .

*MOT: nan ni mo haitte(i)nai yo .

*MOT: neq .

(4) 「この」 Y (1;8.25)

> kwal +t*CHI +s"kono" +o%act -w5 +w5 @

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V2:10825.cha": line 194. Keyword: kono

*MOT: chotto te de shitsurei .

*MOT: hai .

*MOT: <dekimashita dekimashita> [=! singing] . [+ bch]

*CHI: dekita .

%act: sakana ga notte(i)ru osara o miru

*MOT: nomimono o doozo .

*CHI: kono ?

%act: koppu o miru

*MOT: kono naka ni haittemasuyo ,, ocha ga .

%act: koppu o motsu

*MOT: 0 .

%act: CHI no koppu ni nomimono o tsugu

*CHI: 0 .

%act: MOT no motteita ocha ga haitte(i)ru yooki o toru

*CHI: 0 .

%act: jibun de koppu ni nomimono o tsugu

*MOT: aq ,, Ychan ga iretekureru no ?

(5) 「この」 Y (1;9.0)

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V2:10900.cha": line 610. Keyword: kono

*FAT: densha wa kyoo iimashita .

*CHI: a:muq@u .

*MOT: poppoppoppoppoppoppoq@o doko e iku n daroo ,, densha .

*CHI: wakanna .

*MOT: n ?

*CHI: kono ?

*MOT: e:ki [: eki] .

*CHI: eki .

*MOT: susu@u shashashashasha@u .

*CHI: eki .

*CHI: xxx ?

(6) 「この」 Y (1;9.0)

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V2:10900.cha": line 2078. Keyword: kono

*MOT: Yo:kochan da .

*BRO: Yo:kochan tte dore ?

%act: Okaasan kara arubamu o toru

*CHI: xxx ?

*MOT: un Ychan mada aru yo .

*MOT: hai doozo .

*CHI: atto kono hito .

*MOT: dare ga ita kana: ?

*MOT: Oniichan desuq .

*MOT: Oniichan to Otoosan to Okaasan desu .

(1) は、「これ」の例である。(2) は、「ここ」の例である。(3) は、「こっち」の例である。(4)-(6) は、Y児（1;6）-（1;11）における「この」の３例すべてである。(4)と(5) における「この？」は、「このN？」のNを発話できなかった（または、しなかった）という解釈が、第一の解釈であるが、「これ？」の誤用であるという解釈も可能ではあろう。(5) における「この？」は、「この駅？」の駅を発話できなかった（または、しなかった）ことにより、母親から、「e:ki [: eki]」という発音を引き出すことに成功している。幼児による一種の会話方略とみなすべきかもしれない。

なお、本稿で使用した発話資料は、以下の通りである。１９９４年１２月に日本国愛知県名古屋市で誕生し、成長した日本人の一女児の話し言葉を両親などの協力の下に、デジタルビデオ（ミニDVカセット）テープに記録したものを転記したものである。観察対象児は長女であった。観察期間を通じて、１９９０年6月生まれの兄がいた。父親の学歴は大学院修士課程修了。母親の学歴は四年制大学卒業。転記の際の書式はOshima-Takane et al. (1998) を採用した。元データは１ヶ月に４回、各回、一時間をめどにデジタルビデオ（ミニDVカセット）カメラを用いて、筆者が撮影・録音した。本稿において、分析対象とする発話資料は、（1;6）から（1;11）までのものである。発話資料収集時の主な参加者は、以下の通り。CHI= Target child、MOT = Mother、FAT = Father、BRO = Elder brother。

第２章で、幼児における日本語指示詞に関する従来の研究を概観する。第３章では、一女児１才６ヶ月から１才１１ヶ月における日本語指示詞の直示用法について考察する。第４章で、結論を述べる。

第２章　従来の研究

Ono (1991) において、筆者は、日本語指示詞に関する包括的な文献調査を言語学・心理学、双方の領域について行った。金水・田窪の両氏も、同時期に、同じ作業を言語学領域について行っており、その成果は、金水・田窪 (1992) として、公刊されている。また、オンラインでは、下記において利用可能である。

http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/contents.html

日本語指示詞の特徴解明に向け、多くの理論的研究がなされてきた。しかし、第一言語（＝母語）としての日本語指示詞の獲得に関する研究は、多くはない。日本語指示詞の直示用法の獲得研究に限定すれば、遠藤 (1988b,1989b)、伊藤・大嶋 (2004)、門松 (1979)、久慈・斉藤 (1982, 1983)、見澤 (1986)、大久保 (1967)、Ono (1991) 、大野 (2000) 、斉藤・他 (1981)、

斉藤・久慈（1983)などである。

遠藤（1988b,1989b)と並行する興味深い研究として、大人を被験者とした実験研究である遠藤（1988a,1989a)がある。

第二言語としての日本語の指示詞習得に関する研究で、第一言語習得研究にも言及している最近の研究として、森塚（2003)、新村（1992)、Niimura and Hayashi (1994)、迫田（1998)などが挙げられる。特に、迫田（1998:80-84）による「第一言語の場合」の概説は、良くまとめられている。

佐久間（1936, 1951, 1966, 1983:26-27）は、「こそあど」の研究の中で、「著者の集めたものであまり多くの材料がありませんが」と断った上で、三歳までの日本語児の発話にソ系指示詞を見出せなかったことを報告している。[2] 大久保（1967)、岩淵・他（1968）の縦断的観察記録研究が、これを裏付けている。これらの研究によると、まず、およそ１歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から１年くらい遅れて現れる。

岩淵・他（1968:142-143）の観察を、以下に引用する。

「指示のことば

一歳六か月ごろ、代名詞がかなり出てきました。カヨちゃんは、

アコ　ココ　ミチャチャンモ　ココ　ココ　ノッチャッタ　コッチモ　コッチモ

といっています。このほか、「コレ」「コッチ」「アレ」という指示代名詞、それに不定称も出てきています。しかしまだ「ソレ」「ソコ」が出てきません。月別にその出現をみますと、表４−５のとおりです。カヨちゃんの場合、「ソレ」が安定したのは二歳半になってからでした。

大人：　こっち　貸してもらってもいいね。
大人：　カヨちゃん　古いの　貸してもらってもいい？
子供：　イイ。
大人：　新しいのは？
子供：　ソレ　モ　ダメ。
大人：　どうしても　だめ？

「ソレ」「ソコ」は、指示することばの中で、もっともむずかしいようです。その理由の一つは、「ソレ」「ソコ」は相手（聞き手）により近いものをさすときに使われるものです。それが、子どもの場合、自己中心的に判断し、相手との関係を考えることがないから出にくいわけです。

［アンケートから］アンケートでは、指示する対象について、物・方向・場所のどれが先行するかを確かめようとしました。表4－6は、幼児後期用のアンケートの結果ですが、前期用とも関連させてみますと、「コレ、ソレ、アレ」の物をさす単語は、場所・方向をさす指示の単語より早くあらわれることがわかりました。しかし、場所・方向の出現順序はよくわかりませんでした。というのは、「コッチ」「ソッチ」にしろ、「ココ」「ソコ」にせよ、子どもが使うときは物との結びつきが強く、方向・場所の指示だけが抽象されて使われるのではないからです。」

大久保（1967:14-17, 72-74）は、指示詞の獲得順序がコ系・ア系・ソ系の順であることを報告している。大野（2000）、伊藤・大嶋（2004）も、これを確認している。

久慈・斉藤（1982）も、大久保（1967）、岩淵・他（1968）と同様の出現を観察している。久慈・斉藤（1982）は、１歳から２歳半の幼児２４人を対象に８ヶ月間、１週間に１度、幼児たちの母親に指示詞を含むダイクシス語の出現を観察してもらい、それらの表現がいつ頃現れるかを研究した。指示詞の出現は、「ここ、これ」が大体１歳半頃、「あっち、こっち」が１歳９ヶ月である。それに対して、ソ系は２歳４・５ヶ月頃に、「それ、そこ」が出現すると報告している。これは、大久保（1967）、岩淵・他（1968）の報告と合致している。コ・ソ・アを含むダイクシス語全般の傾向としては、１歳後半から、コ・ソ・ア・ド語や動詞が出現し始め、２歳後半になると、ほとんどの語が使えるようになるようだ。各次元におけるコ・ソ・ア・ド語の獲得順序を表１のように提示している。

表１　日本語児による各次元におけるコソアド系の獲得順序
（久慈・斉藤（1982:234　表３））

獲得順序	1 st		2 nd		3 rd		4 th
場所次元	ここ	≫	どこ	≒	そこ	≒	あそこ
もの次元	これ	≫	あれ	＞	どれ	≒	それ
指定次元	この	≫	あの	＝	どの	＝	その
方角次元	あっち	≒	こっち	≫	どっち	≒	そっち

この結果から、久慈・斉藤（1982:233）は、コ系は早く獲得されるが、「ここ、これ」に対立するはずの「あそこ、あれ」がなかなか出現しないため、「ここ、これ」がダイクシス本来の意味でなく、単に代名詞的な意味（絶対的用法）でのみ使用されている可能性を報告している。

千葉・村杉（1987:117）は、「以上の観察をまとめると、日本語では手に持っている、あるいは、手で触れているということが指示詞「この」あるいは「これ」の使用を要求する重要な決め手になるのに対して、英語においては、それが日本語ほど重要な働きをしないということになる。」という重要な指摘をしている。この指摘を、千葉・村杉（1987:142）は、

「現場指示用法の場合、日本語においては、指し示そうとしている物を手で触れている、あるいは、それを手に持っているかどうかということが、指示詞「これ」を用いるか、それとも「それ」あるいは「あれ」を用いるかということを決める際にほとんど決定的と言える程の役割を果たすのに対して、英語においては、それが日本語の場合程には決定的な要因にならないという事実がある。このように、日英語間においては、指示詞選択の際に、「接触」という要因のもつ重要性の違いが見られる（後略）。」と言い換えている。

この指摘に触発され、また、斉藤・久慈（1983:50)の観察事実と対比する目的で、Ono (1991:12-14) は、一女児A児（1;6.2)、(2;0.0)、(2;6.6）の撮影ビデオにおける、指示詞を発話する際の視線や付帯動作を丹念に観察し、下記の事実を報告している。その結果、千葉・村杉（1987:117）による日本語指示詞の現場指示用法に関する指摘を確認した。

表２　A児におけるコ系指示詞各形の出現回数と割合
（Ono (1991:12)　6.1.1. Occurrence of KO　参照）

A児	(1;6.2)	(2;0.0)	(2;6.6)
KORE	36 (92.3%)	59 (84.3%)	72 (53.3%)
KOKO	3 (7.7%)	11 (15.7%)	49 (36.3%)
KONO	0	0	6 (4.4%)
KOCCHI	0	0	7 (5.2%)
others	0	0	1 (0.8%)
TOTAL	39	70	135

表３　A児に対する入力におけるコ系指示詞各形の出現回数と割合
（Ono (1991:13)　6.1.1. Occurrence of KO　参照）

Input	(1;6.2)	(2;0.0)	(2;6.6)
KORE	138 (86.3%)	35 (67.3%)	21 (31.3%)
KOKO	5 (3.1%)	4 (7.7%)	32 (47.8%)
KONO	8 (5.0%)	7 (13.5%)	2 (3.0%)
KOCCHI	6 (3.8%)	2 (3.8%)	9 (13.4%)
others	3 (1.8%)	4 (7.7%)	3 (4.5%)
TOTAL	160	52	67

表４　「これ」発話時のA児の視線の向き・動作・体の向きとそれらの割合
（Ono (1991:13)　6.1.2. Motions with kore　参照）

A児		(1;6,2)	(2;0,0)	(2;6,6)
Eye	Referent	92%	76%	56%

	Interlocutor	8%	22%	36%
	The others	0%	2%	8%
Hands/arms	Touching	67%	80%	72%
	Pointing	19%	17%	18%
	The others	14%	3%	10%
Direction of the body	Referent	75%	86%	69%
	The others	25%	14%	31%

表 5　「これ」発話時の大人の視線の向き・動作・体の向きとそれらの割合
（Ono (1991:13)　6.1.2. Motions with kore　参照）

input		(1;6,2)	(2;0,0)	(2;6,6)
Eye	Referent	41%	31%	86%
	Interlocutor	54%	69%	14%
	The others	5%	0%	0%
Hands/arms	Touching	86%	74%	95%
	Pointing	5%	20%	0%
	The others	9%	6%	5%
Direction of the body	Referent	43%	94%	86%
	The others	57%	6%	14%

表 6　コ系指示詞発話時のA児の視線の向き・動作・体の向きとそれらの割合
（Ono (1991:13)　6.1.3. Motions with KO　参照）

A児		(1;6,2)	(2;0,0)	(2;6,6)
Eye	Referent	92%	70%	62%
	Interlocutor	8%	23%	30%
	The others	0%	7%	8%
Hands/arms	Touching	69%	73%	61%
	Pointing	18%	17%	16%
	The others	13%	10%	23%
Direction of the body	Referent	77%	80%	66%
	The others	23%	20%	34%

表 7　コ系指示詞発話時の大人の視線の向き・動作・体の向きとそれらの割合
（Ono (1991:14)　6.1.3. Motions with KO　参照）

input		(1;6,2)	(2;0,0)	(2;6,6)

Eye	Referent	42%	31%	78%
	Interlocutor	53%	67%	21%
	The others	5%	2%	1%
Hands/arms	Touching	77%	62%	84%
	Pointing	11%	23%	9%
	The others	12%	15%	7%
Direction of the body	Referent	44%	88%	78%
	The others	56%	12%	22%

この結果、わかったことは、「ことばの前のことば：ことばが生まれるみちすじ」（伊藤(1990:8-10)、やまだ（1987）参照）を研究する必要性であった。日本語指示詞の直示用法の場合、特に、それを感ずるが、本稿が扱うものではない。

今年に入って、本格的な研究成果が公刊された。Oshima-Takane (2004) である。紙幅の関係上、Oshima-Takane (2004) の概説は、別の機会に譲る。

第３章　一女児１歳６ヶ月から１歳１１ヶ月における日本語指示詞の直示用法

まず、第１章で概説した、各回約１時間３分の撮影ビデオから、発話、動作などを転記して、発話データファイルを作成した。これら各回の発話データファイルに対して、CHILDES の CLAN を利用して、各種の検索を実施した。（MacWhinney (2000)、MacWhinney & Snow (1985)、宮田 (2004)、Oshima-Takane & MacWhinney (1995)、Oshima-Takane et al. (1998)、杉浦・他（1997）参照。）

まず、freq検索（たとえば、「freq +t*CHI +s"kore"」）をかけ、指示詞各形の出現回数を調べた。

Y児における「あれ」と「ああ」の出現回数が、予測より多過ぎた。間投詞「あれ？」と間投詞「ああ」を除外しなければならないことに気がつき、kwal検索「kwal +t*CHI +s"are" +o%act –w5 +w5」、「kwal +t*CHI +s"aa" +o%act –w5 +w5」、「kwal +t*CHI +s"a:" +o%act –w5 +w5」を行った。kwal検索の結果を印刷し、間投詞の例を探し出し、除外した。その上で、各回の指示詞各形の出現回数を月齢ごとに集約し、「Y児における指示詞各形の月齢別出現回数」を、表８にまとめた。「Y児に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数」を、表９とした。

Y児（1;6)-(1;11）において、freq検索による出現回数は、「あれ」が４０３回、「ああ」が１８４回あった。「ああ」という音形１８４例のすべてが、間投詞であったので、すべて除外し、０回とした。

表８　Ｙ児における指示詞各形の月齢別出現回数

指示詞／月齢	1;6	1;7	1;8	1;9	1;10	1;11	計	割合
これ	47	6	52	42	53	118	318	0.706666667
ここ	0	4	19	24	17	13	77	0.171111111
こっち	3	2	12	2	13	3	35	0.077777778
こちら	0	0	0	0	0	0	0	0
この	0	0	1	2	0	0	3	0.006666667
こんな	0	0	0	0	0	1	1	0.002222222
こう	0	0	0	2	13	1	16	0.035555556
あれ	5	74	106	30	19	169	403	0.788649706
あそこ	0	0	2	0	0	0	2	0.003913894
あっち	10	29	11	10	11	32	103	0.201565558
あちら	0	0	0	0	0	0	0	0
あの	0	0	0	0	1	0	1	0.001956947
あんな	0	0	0	1	0	1	2	0.003913894
ああ	0	0	0	0	0	0	0	0
それ	0	0	0	2	0	0	2	0.25
そこ	0	0	0	1	0	1	2	0.25
そっち	0	0	2	1	0	0	3	0.375
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	0	0	0	0	1	0	1	0.125
そんな	0	0	0	0	0	0	0	0
そう	0	0	0	0	0	0	0	0
コ系指示詞の計	50	12	84	72	96	136	450	0.464396285
ア系指示詞の計	15	103	119	41	31	202	511	0.527347781
ソ系指示詞の計	0	0	2	4	1	1	8	0.008255934
全指示詞の合計	65	115	205	117	128	339	969	

表９　Ｙ児に対する入力における指示詞各形の月齢別出現回数

指示詞／月齢	1;6	1;7	1;8	1;9	1;10	1;11	計	割合
これ	123	157	249	241	182	216	1168	0.581963129
ここ	25	43	46	47	41	27	229	0.114100648
こっち	42	59	35	24	17	28	205	0.102142501
こちら	0	0	0	0	0	0	0	0
この	8	23	49	32	13	20	145	0.072247135
こんな	5	7	17	15	11	15	70	0.034877927
こう	25	34	36	44	19	32	190	0.09466866
あれ	4	39	37	24	18	34	156	0.426229508
あそこ	2	4	8	5	0	3	22	0.06010929
あっち	33	42	22	11	18	34	160	0.43715847
あちら	0	0	0	0	0	0	0	0
あの	2	8	3	5	2	3	23	0.06284153
あんな	0	0	0	1	2	2	5	0.013661202
ああ	0	0	0	0	0	0	0	0
それ	43	46	58	49	56	64	316	0.5
そこ	14	19	8	12	14	8	75	0.118670886
そっち	6	4	8	9	1	4	32	0.050632911
そちら	0	0	0	0	0	0	0	0
その	6	9	9	21	11	5	61	0.096518987
そんな	11	19	15	15	20	12	92	0.14556962
そう	12	11	6	8	17	2	56	0.088607595
コ系指示詞の計	228	323	432	403	283	338	2007	0.667886855
ア系指示詞の計	41	93	70	46	40	76	366	0.121797005
ソ系指示詞の計	92	108	104	114	119	95	632	0.21031614
全指示詞の合計	361	524	606	563	442	509	3005	

「ああ」の場合、入力における５５例も、すべて間投詞であったので、すべて除外し、０回とした。

指示詞「ああ」を含む典型的な発話として、「ああ　いう　（こと・ふうに）」、「ああして」、「ああ　やって」、「ああ　する　（と）」、「ああ　やる　（と）」が考えられる。これらの出現を確認するため、以下のkwal検索を行ったが、この結果も、０回であった。

「kwal +t*CHI +s"aa iu" +o%act –w5 +w5」	「ああ　いう」
「kwal +t*CHI +s"aa yuu" +o%act –w5 +w5」	「ああ　ゆう」
「kwal +t*CHI +s"aa shite" +o%act –w5 +w5」	「ああ　して」
「kwal +t*CHI +s"aa site" +o%act –w5 +w5」	「ああ　して」
「kwal +t*CHI +s"aa yatte" +o%act –w5 +w5」	「ああ　やって」
「kwal +t*CHI +s"aa suru" +o%act –w5 +w5」	「ああ　する」
「kwal +t*CHI +s"aa yaru" +o%act –w5 +w5」	「ああ　やる」
「kwal +t*CHI +s"a: iu" +o%act –w5 +w5」	「あー　いう」
「kwal +t*CHI +s"a: yuu" +o%act –w5 +w5」	「あー　ゆう」
「kwal +t*CHI +s"a: shite" +o%act –w5 +w5」	「あー　して」
「kwal +t*CHI +s"a: site" +o%act –w5 +w5」	「あー　して」
「kwal +t*CHI +s"a: yatte" +o%act –w5 +w5」	「あー　やって」
「kwal +t*CHI +s"a: suru" +o%act –w5 +w5」	「あー　する」
「kwal +t*CHI +s"a: yaru" +o%act –w5 +w5」	「あー　やる」

「こう（= koo, kou, ko:）」と「そう（= soo, sou, so:）」についても、同様のkwal検索を行った。「Y児に対する入力（= -t*CHI）」に対しても、「こう、ああ、そう」に関する上述のkwal検索を行った。「こう、ああ、そう」の内、「こう」は、常に指示詞であるが、単独の「ああ」は、上述したように、間投詞の事例ばかりであった。「そう」には、指示詞の場合と、肯定語（あいづちの「そう（= Yes）」）の場合があり、判別が困難であるので、以下の判別基準をたてた。［１］から順に適用する。［１］「こう、ああ」と相互に入れ替え可能であれば、指示詞。［２］単独の「そう」は、常に、肯定語。［３］直後が、動詞（繋辞は含まない）であれば、指示詞。［４］直後が、繋辞であれば、肯定語である。[3]

Y児（1;6)-(1;11）における「そう」は、freq検索では、３例あったが、kwal検索後の検討の結果、すべて、肯定語の「そう」であったので、すべて除外し、０回とした。

Y児に対する入力における出現例でも、freq検索「soo」で見つかった「そう」１８７例の内、指示詞は２４例のみであった。残りのほとんどが肯定語であった。

「あれ」４０３回の内、間投詞と解釈できるかもしれない「あれ？」が数例あったが、多義的で、指示詞とも解釈できそうなので、すべて指示詞として数えた。

Y児に対する入力における出現例であるが、「こんなん」は、「こんな　ん（＝もの）」と解析されるので、指示詞「こんな」の例である。１１例あった。

これも、Y児に対する入力における出現例であるが、「そのまま（９回）」と「そのまんま（２回）」における「その」は、指示詞「その」と解析した。[4]

Y児（1;6)-(1;11）における指示詞各形の使用実態は、まず、全体像をとらえるために、表８における各系指示詞の出現回数の計を見ると、「ア系（５１１回＝５３％）＞コ系（４５０回＝４６％）≫ソ系（８回＝１％）」である。「まず、およそ１歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から１年くらい遅れて現れる。」という大久保（1967)、岩淵・他（1968）の縦断的観察記録研究の報告と一致していると言って良いであろう。Y児（1;6)-(1;11）におけるソ系指示詞の未発達は明白である。

比較のために、表９（＝Y児に対する入力）における各系指示詞の出現回数の計を見ると、興味深い。Y児（1;6)-(1;11）における「ア系＞コ系≫ソ系」という事実とまったく異なり、「コ系（２００７回＝６７％）＞ソ系（６３２回＝２１％）＞ア系（３６６回＝１２％）」なのである。日本語指示詞の直示用法が確立している成人にとり、通常の会話は、正保（1981:66-75）のいう（「融合型」ではなく、）「対立型」を成す場合が多いため、各系指示詞の出現回数が、「コ系＞ソ系＞ア系」となるのであろう。

共通点もある。Y児（1;6）・（1;11）において、「こちら、あちら、そちら」は、一度も出現しなかった。同様に、Y児に対する入力においても、「こちら、あちら、そちら」の出現はなかった。「こちら、あちら、そちら」を獲得しているはずの成人であっても、おどけて表現する場合を除けば、親が幼児に対して、敬語を使う状況は想像できないので、これも、言語直感と合致する事実である。

Y児（1;6)-(1;11）における指示詞各形の出現回数に目を転じると、出現回数が３桁に達したものは、「あれ（４０３回）、これ（３１８回）、あっち（１０３回）」である。出現回数が２桁に達したものは、「ここ（７７回）、こっち（３５回）、こう（１６回）」である。「この、こんな、あそこ、あの、あんな、それ、そこ、そっち、その」は、出現しているものの、１－３回である。Y児（1;6）・（1;11）が獲得していると言えるのは、「あれ、これ、あっち、ここ、こっち、こう」の６つであろう。

Y児（1;6）・（1;11）の発話において、「あれ」が高頻度で出現した理由のひとつには、誤用があげられる。誤用の例として、たとえば、下記がある。

(7)「これ」の代わりに、「あれ」を誤用　Y（1;11.6）

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V3:11106V4.cha": line 740. Keywords: are

*CHI:　　oo: .

%act:　　yuka ni suwaru

*BRO:　　onbu shite ageyokka: ?

*CHI: a:a: (da)me: .
%act: BRO no ashi o osu
*BRO: onbu shite ageyokka: ?
*MOT: onbu shite kurerunda tte ,, Ychan .
*CHI: are [: kore] wa # are [: kore] wa ?
*MOT: are wa ?
*BRO: harapeko aomushi .
*MOT: hai shi: .
%act: te o oshime no naka ni ireru
*FAT: saikin Y wa kore wa no imi de are wa to hatsuwa shimasu .
*MOT: chiisana tamago ga happa no ue ni notte imashita .

(8) 「これ」の代わりに、「あれ」を誤用 Y (1;11.6)

*** File "Extra HD 3:04Ydata-V3:11106V4.cha": line 2925. Keyword: are
*** File "Extra HD 3:04Ydata-V3:11106V4.cha": line 2939. Keywords: are
*MOT: kotchi [/] kotchi nara daijoobu .
%act: shiroi kamibukuro o akeru
*CHI: n: .
*MOT: aryarya .
*CHI: are [: kore] [/] are [: kore] wa ?
*MOT: n ?
%act: shiroi kamibukuro kara moraimono o toridasu
%act: tsutsumi o akeru
*CHI: are [: kore] wa ?
%act: akai kamibukuro o sawaru
*MOT: sore chigau no datte .
*CHI: a ?
*MOT: sotchi hon no datte nanka .
*CHI: 0 .
%act: MOT o miru
%act: shiroi kamibukuro no naka o nozoku
*CHI: are [: kore] [/] are [: kore] ?
*MOT: nani ?
%act: chairo no kami o toridasu
*MOT: kore ?
*CHI: kore .

*MOT:　　sore nannimo kankei nai yo .

誤用研究や中間言語研究（迫田（1998）参照）は、興味深く、かつ、必要なことであるが、本稿では、上述の指摘にとどめておく。

Y児が「あれ」を高頻度で使用した事実と関係していると推測される事実を、千葉・村杉(1987:111) が、指摘している。「指示詞の用法に関する日英語の違いの中で、日本人にとって最も際立った違いとして映るのは、手に持った物あるいは手で触っている物を指すのに、英語において this の代わりに that を用いることがあるという事実であろう。」

(7)や(8) のような誤用が示していることは、手に持った物あるいは手で触っている物を指すのに、英語において this の代わりに that を用いるように、日本語児においても、手に持った物あるいは手で触っている物を指すのに、「これ」 の代わりに、（誤用ではあるが、）「あれ」 を用いる発達段階が存在するということなのではないだろうか。

第４章　結論

Y児 (1;6)-(1;11) における指示詞各形の使用実態を、大づかみすると、表８における各系指示詞の出現回数の計にあるように、「ア系（５１１回＝５３％）＞コ系（４５０回＝４６％）≫ソ系（８回＝１％）」である。「まず、およそ１歳半ぐらいにコ系とア系が現れ、ソ系は、約半年から１年くらい遅れて現れる。」という大久保 (1967)、岩淵・他 (1968) の縦断的観察記録研究の報告と一致していると言って良い。Y児 (1;6)-(1;11) におけるソ系指示詞の未発達は明白である。

ある文法構造・文法項目について、幼児の使用と大人の使用に相関関係がある場合は多い。相関関係が無い場合には、なんらかの理由があるはずである。日本語指示詞の使用について、Y児 (1;6)-(1;11) との比較のために、表９（＝Y児に対する入力）における各系指示詞の出現回数の計を見ると、実に興味深い。各系指示詞の出現回数は、「コ系（２００７回＝６７％）＞ソ系（６３２回＝２１％）＞ア系（３６６回＝１２％）」であった。これは、Y児 (1;6)-(1;11) における「ア系＞コ系≫ソ系」という事実とまったく異なっている。「日本語指示詞の直示用法が確立している成人にとり、通常の会話は、正保 (1981:66-75) のいう（「融合型」ではなく、）「対立型」を成す場合が多いため」、という理由が考えられる。

Y児 (1;6)-(1;11) における指示詞各形の出現回数に目を転じると、出現回数が３桁に達したものは、「あれ（４０３回）、これ（３１８回）、あっち（１０３回）」である。出現回数が２桁に達したものは、「ここ（７７回）、こっち（３５回）、こう（１６回）」である。「この、こんな、あそこ、あの、あんな、それ、そこ、そっち、その」は、出現しているものの、１－３回である。Y児 (1;6) ・ (1;11) が獲得していると言えるのは、「あれ、これ、あっち、ここ、こっち、こう」の６つであろう。

日本語指示詞の直示用法の獲得過程について明らかにするためには、今回の分析に用いた

ような長期的な数多くの事例収集に基づく縦断的研究が必要である。日本語指示詞の直示用法の場合、「ことばの前のことば：ことばが生まれるみちすじ」（伊藤（1990:8-10)、やまだ（1987）参照）を研究する必要もある。誤用研究や中間言語研究（迫田（1998）参照）も、興味深く、かつ、必要なことである。今後の研究に期待したい。

謝辞・注

＊ 発話資料データベース調整とfreq検索に御協力頂いた村木恭子氏（名古屋大学大学院国際開発研究科博士前期課程）に深謝致します。発話資料収集にあたり御協力頂いたY児、MOT、FAT、BROの各氏、および発話資料データベース作成にあたり、部分的に御協力頂いた愛知淑徳大学文化創造学部多元文化専攻大野ゼミの皆様に謝意を表します。品詞分類に関する質問に御回答下さった宮田Susanne先生（愛知淑徳大学）に感謝致します。

1 発話資料中で使用した記号の内、主要なものは、以下の通りである。コーディングの詳細については、Oshima-Takane et al. (1998) を参照。

(1;6.1) 発話時の観察対象児の年齢。（年；月．日）を表す。

*CHI： 観察対象児の発話のはじまり

*MOT： 母親の発話のはじまり

*FAT： 父親の発話のはじまり

*BRO： 兄の発話のはじまり

%sit： 状況を記述する付属ライン

%act： 行動を記述する付属ライン

%gpx： 指さしなど身ぶりを記述する付属ライン

xxx 聴取不能、テープ起こししても不明の部分

2 早川（1977)、サクマ（1959）の具体例を、ローマ字表記したものを、Ono（1991:7）から引用しておく。「こっち」のローマ字表記であるが、本稿で利用したデータベースでは、JCHAT に従い、「KOTCHI」と表記しているが、Ono (1991) では、「KOCCHI」と表記している。

3.1. Hayakawa (1977): R = His first daughter (Born: 01/08/1974)

(7) Wanwa (with pointing) (0;10.3) (Hayakawa (1977:18))

以下、Hayakawa (1977:22) 参照。

(8) Koe. Korye. (= Please read this picture book.) (1;1.15)

(9) Koko e. (= I am going there.) (1;1.16)

(10) Koko. (= I want to sit on the back of this big doll of dog.) (1;1.16)

(11) Kokko. Kokko. Koko e. (= I want to sit on the chair.) (1;1.17)

(12) Kokko e. (= I want to sit on the chair.) (1;1.17)

3.3. Sakuma (1959:1405-1407, 1410)

A = boy

1;4　Pointing　(03/21/1925)

1;6　Kore (with pointing)　(05/21/1925)

Doko, Kore yo, Taatan koko [= Mommy here]　(05/30/1959)

Kocchi, Acchi, Nani [= What?]　(05/31/1959)

1;7　Konna ni nacchatta　(06/30/1959)

Kocchi no ..., Acchi no ...

Kocchi ni,　Acchi ni　(07/02/1959)

%sit: A found two lights were on though only one light was usualy on.

Acchi ni denki kocchi ni denki　(06/27/1959)

%sit: A found another light was on.

Momoto denki (= Motto mo hitostu)

[= There is another light.]

H = boy: There is a lack of records in the beginning use of KO/SO/A/DO by H.

1;11　H uses koko/kocchi/kore/are/anna etc. freely and suitably.

%sit: H is looking at his father is writing.

Anna ni mocha mocha otoochan

%sit: H is putting a pair of tongs right way

because he found one of the tong was put the other way around.

Kocchi hantai tsuo, Chigatta kocchi janai hantai

%sit: H is looking at a picture in a magazine

*Are [: Sore] nani ittai ?

cf. *Are [: Sore] wa chiranai [: shiranai] .　(3;0, girl)　(Sakuma (1936:26))

The fact that a child is beginning to use SO suggests that s/he begins to develop the 'topic space' which is built on the 'utterance space' by a process of representation.　This means s/he is also beginning to acquire anaphoric use of KO/SO/A.

3　判別基準としては、［1］-［4］の内、［1］と［2］で十分である。

4　品詞分類については、下記が参考になる。しかしながら、従来の研究との対比のため、本稿では、すべての点で、下記に従っているわけではない。

http://jchat.cyber.sccs.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/Wakachi2002v.2.0/gram_dem.html

http://jchat.cyber.sccs.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/Wakachi2002v.2.0/jmor_wclass.html

http://jchat.cyber.sccs.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/Wakachi2002v.2.0/00front.html

参照文献

千葉修司・村杉恵子 1987. 「指示詞についての日英語の比較」 『津田塾大学紀要』, 19, 111-153.

Clancy, Patricia M. 1985. The acquisition of Japanese.
The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 1: The data, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524.
Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

遠藤めぐみ 1988a. 「指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性と
聞き手の非人格化の影響」 『心理学研究』, 59, 199-205.

遠藤めぐみ 1988b. 「日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する言語心理学的研究」
『東京大学教育学部紀要』, 28, 285-294.

遠藤めぐみ 1989a. 「対話者の操作可能性から見た指示詞ソの使用」 『教育心理学研究』, 37, 61-66.

遠藤めぐみ 1989b. 「幼児の指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性の影響」
『日本心理学会第５３回大会発表論文集』, 800.

早川勝広 1977. 「幼児言語の初期段階の考察：初語認定を中心に」
『学大国文：大阪教育大学国語国文学研究室紀要』, 20, 17-26.

伊藤克敏 1990. 『こどものことば：習得と創造』 東京：勁草書房

伊藤恵子・大嶋百合子 2004. 「指示詞コ・ソ・アの出現順序を規定する要因」
『コミュニケーション障害学』, 21:1, 1-14.
http://www001.upp.so-net.ne.jp/comcom/guide/z4540.htm

岩淵悦太郎・他 1968. 『ことばの誕生：うぶ声から五才まで』 東京：日本放送出版協会

門松俊彦 1979. 『指示代名詞（これ、それ、あれ）の使い分けについて』
東京大学教育学部心理学科卒業論文（未公刊）

金水 敏・田窪行則 1992. 『指示詞』 東京：ひつじ書房
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/sizisi/contents.html

久慈洋子・斉藤こずゑ 1981. 「幼児の文脈理解能力について」
『日本心理学会第４５回大会発表論文集』, 451.

久慈洋子・斉藤こずゑ 1982. 「子どもは世界をいかに構造化するか：deictic wordsの獲得」
秋山高二・他・編 『言語の社会性と習得』, 221-243. 広島：文化評論出版社

久慈洋子・斉藤こずゑ 1983. 「視点の変換を要する動詞の獲得順序について」
『日本心理学会第４７回大会発表論文集』, 323.

MacWhinney, Brian. 2000. The CHILDES project: Tools for analyzing talk, 3rd edition.
Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

MacWhinney, Brian, and Catherine E. Snow. 1985. The child language data exchange system.
Journal of Child Language, 12, 271-296.

見澤めぐみ 1986. 「幼児におけるあいまいな指示詞の解釈」
『東京大学教育学部紀要』, 26, 245-250.

宮田Susanne 1995. 「アキコーパス：日本語獲得する男児の１歳５ヶ月から３歳までの
縦断観察発話データ集」 『愛知淑徳短期大学研究紀要』34.183-191.

宮田Susanne・編 2004. 『今日から使える発話データベースCHILDES入門』 東京：ひつじ書房

森塚千絵 2003. 「日本語の指示詞コソアとその習得研究の概観」
佐々木嘉則・編 『第二言語習得・教育の研究最前線：２００３年版』, 51-76. 東京：凡人社
http://jsl2.li.ocha.ac.jp/genbun/saizensen2003/index.html

新村朋美 1992. 「指示詞の習得：日英語の指示詞習得の対照研究」
『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』, 4, 36-59.

http://els.nii.ac.jp/pdfout.php3?1093236970
Niimura, Tomomi, and Brenda Hayashi.　1994.　English and Japanese demonstratives:
A contrastive analysis of second language acquisition.　Issues in Applied Linguistics, 5, 327-351.
http://www.humnet.ucla.edu/humnet/teslal/ial/
大久保愛　1967.　『幼児言語の発達』　東京：東京堂出版
Ono, Seiko.（大野清幸）　1991.　A note on the acquisition of the deictic use of KO/SO/A.
Paper presented at TELC meeting.　32p.
大野清幸　2000.　「一女児における日本語指示詞の発達と付帯動作」
『日本発達心理学会第１１回大会発表論文集』, 7.
大野清幸・大伴　潔・小林春美・白井英俊・白井純子・杉浦正利・平川眞紀子・平川八尋・
湯川笑子・若林茂則・編　2001.　JBIB Search.
http://cow.lang.nagoya-u.ac.jp/jbib/
Oshima-Takane, Yuriko.　2004.　Acquisition of demonstratives and pronouns and
developmental index for Japanese.　Comparative Research for a Developmental Index for
First and Second Language of Japanese and English, ed, by Otomo, 183-196.
Oshima-Takane, Yuriko, and Brian MacWhinney (Eds).　1995.
CHILDES manual for Japanese.　Montreal: McGill University.
Oshima-Takane, Yuriko, Brian MacWhinney, Hidetoshi Sirai, Susanne Miyata, and Norio Naka (Eds).　1998.
CHILDES manual for Japanese, Second Edition.
Nagoya: The JCHAT Project, Chukyo University.
斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・辰野俊子　1981.　「２・３歳児における指示代名詞の理解」
『日本教育心理学会第２３回総会発表論文集』, 258-259.
斉藤こずゑ・久慈洋子　1983.　「母子相互作用における幼児の指示能力の発達：
会話の基礎として」　『國學院大學教育学研究室紀要』, 18, 39-55.
迫田久美子　1998.　『中間言語研究：日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』　広島：渓水社
佐久間　鼎　1936.　『現代日本語の表現と語法』　東京：厚生閣
佐久間　鼎　1951.　『現代日本語の表現と語法：改訂版』　東京：厚生閣
サクマ・カナエ　1959.　「構文の初歩：幼児のことばづかいに即して」
『児童心理』, 13:12, 1400-1410.
佐久間　鼎　1966.　『現代日本語の表現と語法：補正版』　東京：厚生閣
佐久間　鼎　1983.　『現代日本語の表現と語法：増補版』　東京：くろしお出版
正保　勇　1981.　「『コソア』の体系」　『日本語の指示詞：日本語教育指導参考書8』, 51-122.
東京：国立国語研究所
杉浦正利・中則夫・宮田 Susanne・大嶋百合子　1997.
「日本語習得研究のための情報システムCHILDESの日本語化」　『言語』, 26:3, 80-87.
やまだようこ　1987.　『ことばの前のことば：ことばが生まれるみちすじ１』　東京：新曜社